

海ひと夢

スペシャルインタビュー

川崎 一好 会長

6月に行われた第64回ぎよれん通常総会・理事会にて、川崎一好会長が就任しました。

今月の「海ひと夢インタビュー」は、川崎会長に、本道漁業を取り巻く状況への考え、今後の抱負などを伺いました。



自然と共生し、資源を次の世代へ

—先日、北海道漁業協同組合長会議の決議事項に基づき、道・国への要請をされました。要請活動を終えての感想はいかがでしたか？

これまでも、系統代表者の一人として、道・国への要請活動を行ってきましたが、ぎよれんの会長という立場で、今まで以上に責任の重さを痛感しながら決議事項をお渡ししました。知事や道議会、国会議員、水産庁長官をはじめ政務官の皆さん等に、熱っぽく伝えるようにお願いをしてきました。

—川崎会長の「熱っぽく伝える」ご様子は、先日の会長就任挨拶でも強く印象に残りましたか？

第一次産業、特に漁業については、いかに自然と共生しながら生計を立てていくのかが一番大事なことです。私達は自然から魚や貝を取らせていただき、漁村・町づくりをおこなっています。町の大小に関わらず生産活動があります。経済的な効率ばかりが優先される大手メーカーのような産業とは違うわけで、それを理解いただくために、第一次産業を語る時には、熱っぽさが必要だと思います。

北海道も、昔は人間が住めるかどうかともわからないところに住みついて漁を行い、町を作ってきました。その原点を忘れないことが大切だと思います。その点、今の漁業者の皆さんは、資源管理の意識をしっかり持っています。

ます。「資源を次の世代へ渡していく」皆、その大きな使命のなかで漁業を営んでいる、私はそう思っています。

—資源を次世代へ伝えていくためには、今回の組合長会議の決議にもある「漁場環境の維持」なども重要になってきますね。

北海道は、給餌をせずに、自然の中で育てる漁業が非常に奏功しています。

以前は、日本海や太平洋に比べると、オホーツクはなかなか資源に恵まれない地域でした。それが今では、無給餌型の増養殖に関しては、日本のなかでオホーツクが一番の漁場と言っても過言ではありません。それは並々ならぬ漁業者の皆さんの努力、加えて、行政や関連する皆さんのたゆまない努力があったからだと思います。こういう良いお手本が北海道にはあるわけですから、日本海や太平洋においても、無給餌型の増養殖ふくめた回遊魚の資源回復はこれからも可能であろうと私は考えています。

21世紀に適った漁業を目指し、ぎよれんの役割を発揮したい

—そういった意味では、行政や増養殖に関連した機関との連携もますます重要ですね。

漁業者、行政、民間の水産業で生きる皆さん、それぞれの立場に応じた考え方があります。その皆さんが知恵を出し合うと、21世紀に適った漁業の形態が生まれてくると思います。

「量より質の漁業への移行」ということが言われて久しいですが、「こうすればいい」という全道一律の答えはないと思っています。例えば、沖で獲れた魚を活締めにし、鮮度よく消費者のもとへ届けることも必要でしょうし、あるいは、ブランド化に向けて、ネーミングをして消費者に親近感をもってもらいながら、魚や貝と接してもらうことも必要です。また、この時期にはこの地域のおいしいものがあつたなと消費者に浸透するような、宣伝コマースシャルも必要だろうと思います。

魚の名前は同じであっても、各浜によって味が違い、獲れる時期が違ふなど、特長があります。そこが、先ほど申し上げた全国一律の大手メーカーとは違う点なんです。その違いや特長を、各浜が努力して消費者の皆さんに知ってもらいながら、一番いい時期に、一番いい状態で食べてもらう工夫が必要です。たゆまない努力をすれば、消費者の皆さんは必ずリピーターとして、その地域のおいしい魚についてきてくれる、旬の魚をととても楽しみにしてくれる、そう思っています。私はそのお手伝いを、ぎよれんでしていけたらと思っています。

現在の輸出促進の環境は、本道漁業にとっても良いチャンス

—国内市場と並んで重要性を増している海外市場については、いかがでしょうか？

ぎよれんでは、これまで、ほたて、秋鮭等、海外への輸出を積極的に行い、海外の皆

さんにもおいしいものを食べてもらう努力を最大限行ってきました。

最近では、T P P問題等、課題も多くありますが、逆に、それぞれの産地では官民一体となつて、名産品を海外に向けて売り出す施策も積極的に行っています。国や地域の行政が輸出に積極的になつている現在の状況は、本道水産業にとつても、良いチャンスです。現代はグローバル社会ですから、色々な制度を上手に使いこなせられるように勉強しながら、絶えず海外市場も含めて物事を考えていくことが大事だと思っています。

燃油高騰対策や原発災害対策などの課題に的確に対処

—組合長会議の決議事項にもあります「燃油高騰対策」や「原発事故の災害対策」など漁業経営を脅かす課題もあります。この2つの問題についてはいかがでしょうか？

私が漁業に従事した当時のA重油の値段は30円前後。魚は今と同じ位の値段がしました。魚の値段は上がらないのに、A重油は今や100円に届きそうな勢いです。特に最近の急激な燃油高騰は漁業経営を脅かすもので、国に緊急補償対策を強く求めているにもかかわらず、はならないと思っています。

一方で、我々の生産する物は、インフレ(物の値段が上がる)状況下にあつても値段が落ちてきました。これはどうしてだろうと考えますと、輸入水産物との競合も要因のひとつと考えられます。関税をかけて輸入水産物を

入れないでほしいという対策もありますが、先ほど申し上げた通り、これからは世界との距離は縮まる一方ですので、輸出に関する競争も怠らず、世界の消費者が好むような商品作りなど対策を講じることも必要だろうと考えています。

大震災については、現在2年以上が経過しても、人が住めない地域があり、魚が食べられない等の状況が続いているのは大変な問題です。

エネルギー政策が難しいのは充分承知していますが、自然とともに今後も生きていかななくてはならない我々漁業者にとつては、この原発事故は将来に対する警鐘であり、もう一度見つめなおさなくてはならない問題だと思います。

仲間、地域を大切にすることが協同組合運動そのもの

—先日の就任挨拶では、お父様と親子二代で協同組合運動に携わっている思いをお話いただきました。その思いをもう少し詳しくお聞かせ願えますか？

私が16歳の時、父が亡くなりました。お袋と二人、人を使いながら漁業をしていく立場になりましたので、沖へもそれほど行けず、陸で親方をやるようになりました。その時に

感じたのは、沖に出る漁業者は、船団を組みながら常に助け合い、お互いに情報を取りながら非常に協力的だということです。沖の仕事は命がけですから、友達づくりに一生懸命なんです。その時、私は陸にいて、「漁獲されたものをどうするか」ばかりを考えていましたが、それは間違いだと気付きました。沖の人たちがやりやすいように、船団の考え方に沿ったことを漁業協同組合はやるべきではないかと考えるようになりました。それが私の協同組合運動の原点です。よって、部会や班を大事にしながら、自分だけが魚を獲るという意識ではなく、その地域の一員として一緒にやって魚を追いかけて、貝を育てながら、生活の糧にしていけることが大事だと感じました。まさに、「自主、自立、互助、民主主義」協同組合運動そのものです。

現代の状況で言いますと、若い人のなかに、「生き物をつくり育てる、それを消費者の方に楽しくおいしく食べてもらう」ことに生きがいを感じる人が増えてきているように感じます。漁業者の減少ということが言われていますが、日本の国そのものが少子高齢化で人口が減少している時代ですから、漁業者においてもある程度減少傾向にあるものと思っています。しかし、決して、漁師の仕事が嫌だから減っているのではなく、逆に、漁師の楽しさを理解できる若い人たちが増えてきて、彼らなりに人と人とのつながりを大事にしています。私はそれがとても大切なことだと思っています。



真心を持って、まっすぐに進む

—日頃大切にしている言葉や考えなどがあれば、教えてください。

私が一番大事にしているのは「誠心誠意」そして「真心」です。将棋のように何手先を読んで行動するようなことはしません。このことをやりたいと思えば、どんな険しい道でも進んでいきますし、このことが嫌だと思えば止めます。結論を出さないでまあまあでいくのが、私は一番ダメだと思っています。「真心を持ってまっすぐ進んでいく」のが、自分の生き方です。

全道の皆さんとコミュニケーションを取り、ぎよれんとして出来る対策を実施

—浜の皆さんへのメッセージを改めてお願いします。

いたします。

時代の流れや自然環境の変化も早く、そのなかで、毎年同じ漁をしていても大きな違いが生まれてきて、大変な時代に入ってきていると思います。今まで以上に、環境問題や資源問題に積極的に取り組んでいかななくてはならないと思います。皆さんと一緒に頑張って、資源作りをしつかり行い、次の世代へ伝えていきたい。その為には、出来るだけ全道の浜を回り、皆さんの漁業をしつかり見させていただき、ぎよれんとして出来る様々な対策を考えたいと思っています。

私は離れた場所の人とも、電話でコミュニケーションを取ることを心掛けていますが、今回会長職に就いたことでその頻度が減ることを心配しています。浜の皆さんが気づき、考えていることがあれば、遠慮なく、電話でも結構ですので教えていただければと思います。全道の皆さんとどんどんコミュニケーションを取っていききたいと思っています。

Profile

昭和26年、厚岸町生まれ。代々木第一経理専門学校卒業後、川崎漁業部に従事。平成8年より厚岸漁協代表理事組合長を務める。平成13年から平成19年にかけてぎよれん理事、平成19年からは北海道漁業信用基金協会理事長を務めるなど、要職を歴任。妻、長男夫妻、二人の孫の六人家族。一番楽しい時は、仕事をしている時。